

奨励賞

仲間と意欲的に学び、言葉を吟味して思いを表現する生徒の育成

愛知県岡崎市立竜海中学校

いちかわ しょうこ
市川 翔子

実践の概要

本学級では、物語教材の感想交流の際、人物の心の機微を読み取れない生徒が多くいた。

本単元では、短歌に親しみ、歌われている情景や作者の思いを想像しながら読む。三十一の限られた音数の中で心情を表現するので、よりよい表現や言葉を選ぶ必要性を学ぶことができる。と、短歌を学習するよさを捉えた。

自分を見つめ、大切な人に対する思いを短歌で表現し、自身の内面や言語能力と向き合った生徒たちは言葉を選んだり、仲間のよい表現から学んだり、より伝わる表現を目指して言葉を磨く中で、自己を表現する姿が見られることを期待して、研究に着手した。

論文内容の紹介

1 研究の実際

(1)「目的をもつ」段階

手立て① 中学生が創作した「大切なものへの愛の短歌作品（自主教材）」3首の提示

抽出生徒R（以下、R）は、3首の短歌を仲間と写真のように語り合い「短歌は少ない音数だからこそ言葉に思いが詰まっている」「同じ中学生の思いが心に響いた。自分も書きたい」と、短歌を学ぶ期待感を高めた。



手立て② 短歌を書けない体験

教師が意図的に「みんなも書いてみよう」と突如投げかけた。Rは「人の短歌を読んで想像するのは楽しかったけど、自分では書けない」と述べ、困り感をもった。Rは「情景、気持ちの言葉を見つけない」「自分の思いを、短い言葉でどう表現できるか学びたい」とノートに書いた。Rは、短歌を読む目的や、短歌から学ぶという意欲をもてた。

(2)「活用の基礎・基盤を培う」段階

手立て③ 教科書の先人の短歌を分析し、作者になりきる「解釈ボード」作り

ア「表現技法から読み解く」

イ「作者が歌にこめた思いを想像する」

ウ「世界観をイメージして絵を描く」

この手順を踏むと「短歌の解釈文」を書くことができることに生徒たちが気づける教師自作の「解釈ボード」を提示した。Rは教科書の短歌を班の仲間とア、イ、ウの順で読み解き、表現技法による作者の工夫を根拠にして短歌を解釈し、読み味わっていた。

(3)「表現・活用する」段階

手立て④ 一人一つ「大切なものへの愛の短歌作品」創作

Rは、解釈ボードを作った際とは逆の手順を踏むと短歌が作れることに気づいた。仲間との時間が続いてほしいと願い、推敲を重ね、「心から笑顔になれるきみとなら止まれ時間つづけ青春（あおはる）」と創作した。ここまでで学んだ「倒

置法、対比的な対句表現、体言止め」を生かした作品に仕上げた。Rは「言葉を厳選して、技法を用いて本当に相手に伝えたいことを表現できるようになった」と、自分の成長や達成感をノートにまとめた。

2 | 成果と課題

4つの手立ては生徒が表現を磨き、思いをこめて短歌創作するのに有効だったが、手立て②で「自分には短歌ができない」と不安感をもった生徒がいた。「期待感を継続させるような手立て」について再考したい。

奨励賞

主体的な探究を通じて 新たな価値を創り出す 防災教育

愛知県岡崎市立竜海中学校

たけ い しょう
武井 翔

実践の概要

家庭や地域での防災対策の提案を通じて、防災の担い手としての自覚を高め、主体的に行動しようとする姿勢や態度の育成を目指した中学2年生の「総合的な学習の時間」の研究実践である。SDGs（持続可能な開発目標）の視点に立った個人追究課題に取り組んだ後、協働して解決を図る学級追究課題に発展させた。単元を通じて、岡崎市防災課担当者から直接学ぶ場を複数回

設定し、生徒の主体性を一層高めるようにした。そして、学びの成果物を家庭生活に積極的に広げたことで、生徒及び保護者の防災意識が一段と高まった。

論文内容の紹介

1 | 研究実践について

(1) 個人追究課題「My Glocal Action Plan (GAP)」について

- ① 「総合的な学習」でグローバルな行動計画を立てて実践していくことを生徒に説明した。「SDGs（持続可能な開発目標）」を紹介した上で、防災に関わるゴールを取り上げることを知らせた。
- ② 市防災課と連携を図り、個人追究課題の決定の参考になるよう、本市及び本校学区に関わる災害の事例や対応策、大規模災害からの教訓等に関する学習会を開催した。
- ③ 夏休み期間中に個人追究に取り組んだ後、9月に学級で「追究成果発表会」を開催した。追究レポートは、約1か月間教室に展示し、学級追究課題の決定に向けた閲覧期間を設けた。

(2) 「竜海の奇跡」プロジェクト(学級追究課題)について

- ① 「釜石の奇跡」に関わる映像資料を視聴した後、「自分たちにできる防災対策」を考えるため、「竜海の奇跡プロジェクト」を立ち上げた。学級では「災害時に役立つ持ち出し品リスト」の提案に着手した。
- ② 市防災課による「避難所運営ゲーム（HUG）」を体験し、日頃の備えの大切さを実感できる機会を設けた。
- ③ 自分たちが考えた防災対策の具体案を1年生に説明し、意見を求める合同授業を実施した。聞き手（相手）を意識して発表する必要性を学んだ。
- ④ 11月に、学年で「追究成果発表会」を開

催した。その際には、市防災課担当者を講師として招いて、直接、指導・助言を受けることができるようにした。

- ⑤ 「防災家族会議」を計画し、家庭生活での活用・応用を目指した。実際に成果物(「防災家族会議」を進める際に役立つシート)を家庭に持ち帰って家族会議を開く等、家庭も巻き込みながら防災意識の向上を図ることができた。

2 | 研究の成果と今後の課題

《成果》生徒及び保護者の防災意識の確かな向上

生徒を対象とした単元末に実施した「防災意識の向上」に関わる意識調査で、学年全体は93%、学級は100%の好回答を得た。また、保護者対象の同様の意識調査では、当該学年の保護者の好回答が62.5% (H29) →78.4% (H30)へと上昇し、前年度比で15.9%増加した。

《課題》SDGsの視点を生かした教材開発・授業研究の充実

生徒がSDGsをいかに自分事として捉え、具体的な行動につなげていくか、「総合的な学習の時間」を中心に、教科の授業との関連を考慮しながら、その充実を図っていきたい。